

現場指示用法におけるコ・ソ・アについて

－ 韓国語との対照という観点から －

金原 鑑*

目 次

1. はじめに
 2. 兩言語における現場指示の指示詞に対する先行研究の検討
 3. 現場指示のコ・ソ・アによる指示形式の分類
 4. 現場指示における日韓指示詞の対照分析
 - 4.1 「自立型」
 - 4.2 「依存型」
 - 4.2.1 「融合型」
 - 4.2.2 「對立型」
 5. おわりに
-

1. はじめに

日韓兩言語における指示詞は、近称・中称・遠称という用語の用いられ方や、「コ・ソ・ア」系列、「이・그・저」系列という三系列の對立体系を持つことなど、いろいろな面で一致するとされている。が、一方では次の例に示すような相違点も見られる。

(1) (話し手と聞き手が10メートルくらい離れて向かい合っている時、その少し斜めの真ん中辺りにいる犬を指し示しながら)

A: その犬はどこの犬だろうね。(저 개는 누구의 개입니까?)

B: それは金先生の犬だわ。(저것은 김선생님의 개예요.) (宋(1990)、p.145)

例(1)では、聞き手の視点が話し手の視点と相對立しながら、話し手が空間的または心理的に自分と相手との少し斜めの真ん中あたりにあるものを、日本語では「ソ」で指しているのに比

* 韓國外國語大學校 日本語科 待遇教授 日本語學

して、韓国語では「저」で示している。すなわち、例(1)の場合、韓国語では中称の「소」(中立(指示)の「소」と呼ぶ)にあたる指示詞が存在しないので、話し手と聞き手がある程度離れて向かい合っているような位置関係で、その少し斜めの真ん中辺りにあるものが「오」「그」ではない遠称「저」で指されている。このように、現場指示における両言語の指示詞の使われ方には相違点が見られる。このようなことを念頭に置いて、本稿においては次のようなことを明らかにする。

- (i) 現場指示の各指示形式においては、どのような要因の相違によって、両言語の各指示詞の選択が行なわれているか。
- (ii) その指示詞の指示体系の差をもたらす決定的な要因にはどのようなものがあるか。

そのために、まず対照の観点から両言語における現場指示の指示詞(「코·소·아」と「오·그·저」)を扱った先行研究について検討した上で、現場指示の코·소·아による指示形式の分類を行なう。次にその指示形式に基づいて日韓指示詞の対照分析を試みる。その際、空間的及び心理的視点と遠近概念とを理論的基盤として援用することにした。

2. 両言語における現場指示の指示詞に対する先行研究の検討

ここでは、両言語における現場指示の指示詞を対照の観点から扱ったもののなかで、現在の研究と深く関わるものを重点的に取り上げる。

梅田(1973)は、日本語の코·소·아가具体的な事物を指し示す際に用いられる場合のそれぞれの領域範囲は、近称・中称・遠称という距離の遠近による違いに基づくのに對して、韓国語の오·그·저は、第一人称者の領域にあると認められる場合に「오」、第二人称者の領域に屬すると認められる場合に「그」、そのいずれにも屬さない場合に「저」を使うと述べ、日韓指示詞の使い分けの原理について説明している。

田村(1978)は、この梅田(1973)の見解のうちの一部に異議を唱えつつ、両言語の文學作品の翻譯例における指示詞の對應のずれに着目して、日韓指示詞の相違点について論じている。

梅田(1982)は、對話において、話し手が「저」で指示したものに對しては、聞き手は「그」で受けて言うのが普通であるが、聞き手が改めて對象を具体的に指示しなおして言う場合(指し直しの場合)には「저」でも受けて言えるということを指摘した。そして前者の場合は、文脈内指示の用法と同様、一度言及されたものについてはすべて「그」によって受けるという照應規則が存在することによるものと説明した。

申(1985)は、ダイクシス用法－I(現場指示)における距離のとらえ方において、日本語の場合は코より遠く아より近いものを소で表すが、韓国語ではそれに対応する「그」の用法がないと

いうことを指摘した。

宋(1990)は、現場指示用法を獨立的現場指示、相對的現場指示の融合型、相對的現場指示の對立型の三つの使用上の状況に大別した上で、プロトタイプ論的な見方でコ・ソ・アの用法を見極めて、それをもとにして、韓國語の「이·그·저」との對照分析を試みた。

宋(1991)は、相對的現場指示の對立型には自称の「코」と「이」、對称の「소」と「그」しか現れないということを指摘している点以外は、宋(1990)での記述とほとんど一致している。

姜(1997)は、日韓兩言語における現場指示(空間指示)の指示語の異同を實驗的方法によって明らかにしている。その中でも、韓國語に日本語の中称の「ソ」にあたる指示語が存在しない理由として、對称の「그」のなわばりが自称の「이」のなわばりより狭いからであることを挙げ、「이」と「저」が、日本語の中称の「ソ」にあたるなわばりをだいたい半分ずつさしわけていると述べた。

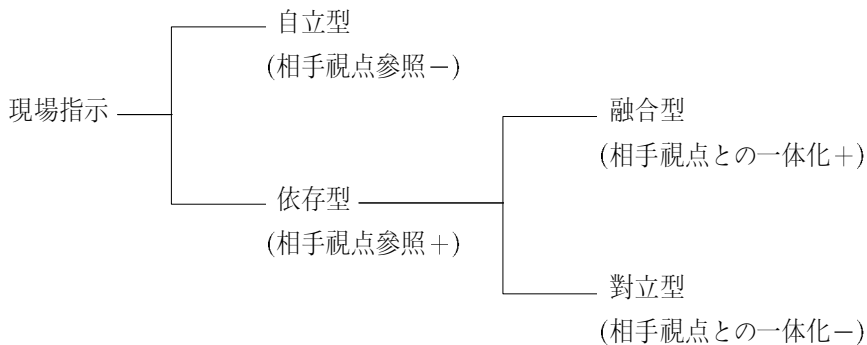
以上のような先行研究の検討の結果、明らかになった問題点は、次の点である。

- 1) 現場指示の「自立型」では、話し手の空間的・心理的距離によって中称の「ソ」の指示領域が出現する。また「對立型」では他称の「ア」と「저」との指示領域が出現可能であるにもかかわらず、そのことについてはほとんど触れてない、または無視、否認している。
- 2) 韓國語に日本語の中称の「ソ」にあたる指示詞が存在しない理由については、一部の研究でしか言及されていない。
- 3) 日韓兩言語における現場指示の指示詞については、聞き手の役割にそれほど意味を付与しない話し手中心の研究が主流をなしてきた。

以下ではこのようなことを踏まえて、先行研究とは異なった観点から、現場指示のコ・ソ・アによる指示形式の分類を行ない、さらにこの指示形式に基づいて日韓指示詞の對照分析を試みることにする。

3. 現場指示のコ・ソ・アによる指示形式の分類

現場指示のコ・ソ・アに對する指示形式を、まず(話し手による)聞き手視点の参照様式の有無によって、そのない「自立型」(聞き手が仮にいてもいないものと見なす場合も含む)とそれのある「依存型」にわけ、さらに「依存型」を聞き手の視点の捉え方によって、その視点を(同一化・)一体化する「融合型」とそれを積極的に参照する「對立型」に下位區分する。そして、このようなことを図にまとめると、次の通りとなる。



[図1] <現場指示における各指示形式図>

4. 現場指示における日韓指示詞の対照分析

ここでは3で分類した各指示形式に基づいて、現場指示における日韓指示詞の対照分析を行うことにする。

4.1 「自立型」

話し手が聞き手の視点とは関係なく「指示の場」を作り上げる際の指示形式を「自立型」と呼ぶ¹⁾。

(2) 信夫は、まっすぐに吉川の家に行くことをやめて、創成川のほとりに立った。(略)(あの山は、この札幌の町が、うっそうたる原始林であった時から、あの形のままであそこにあったのだらう)(『塩狩峠』)

(略)『저 산은, 이 사뿐로의 거리가 울창한 원시림으로 덮혀 있었을 때부터 저 모습대로

1) 以下、本文及び表(1~3)に用いられる記号標示について簡単な説明を加えたい。

(-) : 否定の標示 / (+) : 肯定の標示 / (↑) : 相当高い / (✦) : それほど高くない / (∧) : 条件の同時満足
 の標示 / 「S」 : 話し手(Speakerの略) / 「H」 : 聞き手(Hearerの略) / 「P」 : 発話関与者=S+H(Participantの略) // [+近(S)] : 話し手から近い / [-近 ∩ -遠(S)] : 話し手から近くも遠くもない / [+遠(S)] : 話し手から遠い / [-遠(S)] : 話し手から遠くない / [+近(P)] : 「われわれ」(韓国語の場合は「우리」)から近い / [-近 ∩ -遠(P)] : 「われわれ」から近くも遠くもない / [-近(P)] : 「われわれ」(「우리」)から遠くない / [+遠(P)] : 「われわれ」(「우리」)から遠い / [+近(P)∩+近(S)] : 話し手に近い / [+近(P)∩+近(H)] : 聞き手に近い / [+近(P)∩(+近(S)U+近(H))] : 話し手にあまり遠くない / 「+近・+強」 : 心理的に近いながら感情移入度が強い / 「-近・+弱」 : 心理的に遠くないながら感情移入度が弱い / 「+遠・+強」 : 心理的に遠いながら感情移入度が強い /

저기에 있었잖지.)(『설령』)

例(2)に見られるように、話し手は現場にある知覚できる具体的な対象に對して、自分にとって空間的または心理的に近いものと認識した場合([+近(S)])には近称の「코」を、遠いものと認識した場合([+遠(S)])には遠称の「아」を用いることが出来る。但し、例(2)での「코」は、抽象的ではあるが話し手が現在立っているその現場の外にまで指示空間が擴張された対象を指し示しており、その際は話し手の空間的な距離よりは心理的な距離のほうが優先的に選擇されているようである。それに対して韓国語では、話し手が知覚対象を自分にとって空間的または心理的に近いものと認識した場合([+近(S)])には近称の「이」で、遠いものと認識した場合([+遠(S)])には遠称の「저」で指示し得るが、例(2)の「이」による対象指示は、話し手の心理的な距離が空間的な距離に優先して適用された結果によるものであると考えられる。

(3) (急いで、家を出ようとするときに)

「これと、それと、あ、あれももっていかなきゃ²⁾
」 「이것과 저것과, 아! 저것도 갖고 가야지.

例(3)は、話し手が眼前に並べてある具体的な知覚対象を見ながら獨り言をいう場面であり、ここでは話し手の空間的または心理的距離によって「これ・それ・あれ」が使い分けられている。すなわち、現場の知覚対象に對して、話し手が自分にとって空間的または心理的に近いものと認識した場合([+近(S)])には近称の「코」が、遠いものと認識した場合([+遠(S)])には遠称の「아」が、そして、近くも遠くもないものと認識した場合([-近 ∩ -遠(S)])には中称の「소」が各々用いられている。それに対して韓国語では、現場の知覚対象は話し手の空間的または心理的距離によって「이것・저것」で指し分けられている。すなわち、話し手が指示対象を自分にとって空間的または心理的に近いものと認識した場合([+近(S)])には近称の「이」で、遠いものと認識した場合([+遠(S)])には遠称の「저」で指示しているのである。そして、日本語の中称の「ソ」で指されているものに對しては、「이」や「저」を用いて示している。このような例(3)では兩言語の各指示詞の選擇時に違いが見られるが、その要因を検討するために、次のような例(4)を分析してみよう。

(4) サムドリのやつは遠くから様子を窺うばかりでいたところへ、アンヒョプチブを番人が連れて行くのを見ると眼をいからせた。

2) 中称のソについては、以下のような記述を参考にされたい。
西出(1993)では、實驗を通して、この「自立型」に相當する指示形式である「個人型」は、(話し手の)身体を中心に「コレ・ソレ・アレ」の順に取り囲む同心卵型に指示領域が分節され、それぞれが距離により「近い」、「中位」、「遠い」ものを指示する、ということをも明らかにしている。(pp.38-39)

「やや、あいつ虎のサムド리를知らぬとみえる。だが一体どういふつもりなんだ？ やつアンヒョブチブに手でもだしてみやがれ！(略)」(「桑の葉」『朝鮮短篇』上)
 (略)에 이 높이 호랑이 삼돌이를 모르는 모양이다. 그러나 대관절 어떻게 할 셈이나? 이놈 안협집만 건드려 보아라. (略)」（「뽕」『한국소설문학대계22』）

例(4)では同じ現場の知覚対象を指示する際、日本語は遠称の「ア」を用いているのに對して、韓國語では近称の「이」が使われている。詳しく言えば、日本語では話し手が現場の具体的な指示対象を自分にとって心理的よりは空間的な距離から遠いものと認識([+遠(S)])して遠称の「ア」で指しているのに比して、韓國語では空間的よりは心理的な距離から近いものと認識([+近(S)])して近称の「이」で指している。さらに、例(4)のような状況での知覚対象を描寫する際、日本語は話し手自身がその状況から離れて客觀的にその対象を描寫する(=主客分離の視点による)のに對し、韓國語はその状況の中に自分自身も介入して描寫している(=主客結合の視点による)と言えよう。すなわち、例(4)のような状況で話し手が指示対象について描き出す場合、日本語では心理的距離より空間的距離の優先的な發動とともに觀望的な姿勢も反映されて遠称の「ア」が用いられるのに對し、韓國語では空間的距離より心理的距離のほうが優先的に選擇されると同時に積極的な關与態度も發動して近称の「이」を用いる、という点で對照をなしている。

このように現場指示の「自立型」においては、(話し手による)聞き手視点の参照様式の有無、(現場の知覚対象に對する話し手の)空間的・心理的距離、言語場への依存性、主客(分離・)結合の視点といった要因の働き方の差によって、兩言語の各指示詞の選擇が行なわれているようである。以上のようなことをまとめると、次の通りとなる。

(a) 日本語、韓國語とも、(話し手による)聞き手視点の参照様式がない。

(b) 日本語では、知覚対象に對する空間的または心理的な距離が
 [+近(S)] であれば、 近称の「코」(例(2,3))
 [-近 n-遠(S)] であれば、 中称の「소」(例(3))
 [+遠(S)] であれば、 遠称の「아」(例(2,3))
 知覚対象に對する空間的な距離が
 [+遠(S)] であれば、 遠称の「아」(例(4))

韓國語では、知覚対象に對する空間的または心理的な距離が
 [+近(S)] であれば、 近称の「이」(例(2,3))
 [+遠(S)] であれば、 遠称の「저」(例(2,3))
 知覚対象に對する心理的な距離が
 [+近(S)] であれば、 近称の「이」(例(4))

がそれぞれ用いられる。

- (c) 日本語では、知覚対象を指示・描寫する際、言語場への依存性が相当高く、主客分離の視点による客観的な方法が、韓国語では、知覚対象を指示・描寫する際、言語場への依存性がそれほど高くなく、主客結合の視点による主観的な方法が取られることがある。

4.2 「依存型」

話し手が聞き手の視点を参照して「指示の場」を作り上げる際の指示形式を「依存型」と呼ぶ。これは聞き手の視点の捉え方の相違によって、「融合型」と「對立型」に下位区分できる。

4.2.1 「融合型」

話し手が自分と相手と同じ立場に立つものと認識した際の指示形式を「融合型」と呼ぶ。すなわち、これは聞き手の視点が話し手に融合・一体化される「意識の場」の一種と言えよう。

以下、このような「融合型」に屬する日韓兩言語の指示詞の對応例について考えてみよう。

- (5) 「面なんかわからんよ。日本三景と同じで、日本にあることを知ってるが、まだ見たことはないね。」
- ① 面箱は二つあった。鈴木は袋から面を出して、
- ② 「これが、慈童、こちらが喝食と言うんだそうだ。両方とも子供だ。」
- ③ 「これが子供？」吾吾は喝食を取り上げると、両方の耳穴に通した紙紐をつまんでながめた。(『山の音』)
- (略) “이것을 慈童(지도), 이쪽을 喝食(갓시키)라고 한대 양쪽 다 아이야.”
- “이게 아이라고 ?”(略) (『산소리』)

例(5)の「これ」「こちら」は話し手と聞き手の眼前にあるものである。ここで近称の「コ」が用いられているのは、話し手が聞き手も自分と共通の認識を持つと想定して「われわれ」の場を構成した上で、空間的に我々の近くにあると認識([+近(P)])したものを指すからである。そして、ここでの「コ」は、指示対象に對して空間的に話し手と聞き手が對等に關わっているが、聞き手の視点が話し手に同一化・一体化されて話し手の視点のみが参照される場合に用いられる「融合型」の「コ」である。一方、韓国語では、話し手が自分と聞き手との眼前にあるものを近称の「イ」で指している。すなわち、この「イ」は、話し手が聞き手も自分と共通の認識をもつと想定して「우리」(=わたしたち)という場を構成した上で、空間的に「우리」の近くにあると認識([+近(P)])したものを指示するのに用いられている。その際、聞き手の視点が話し手に同一化されて話し手の視点のみが参照されているわけである。

- (6) 「この辺にいい医者がありますか」(略)
 「勝呂医院がすぐ、そこじゃないか」
 「腕はいいんですか、あの先生」(『海と毒薬』)
 “이 근처에 용헌 의사라도 있습니까?”(略)
 “스구로 병원이 바로 요양 아닌가.”
 “용한지요, 그 분은?”(『바다와 독약』『한길세계문학6』)
- (7) 「それで——」浅井助手は突然、勝呂の方を見ながらゆっくりと言った。
 「勝呂君に診さしておいた患者のことですが」 「だれかね」
 「そこに寝ている施療の女性患者です」(『海と毒薬』)
 “그러구——”아시아 조수는 돌연, 스구로 쪽을 보면서 천천히 말했다.
 “스구로군에게 맡겼던 환자 말입니다.” “누구지?”
 “저기 누워 있는 무료 여성환자입니다.”(『바다와 독약』『한길세계문학6』)

例(6)、(7)の「そこ」が指示しているのは話し手と聞き手のどちらにとってもそれほど遠くない場所であることは明らかである。すなわち、ここで「ソ」が用いられているのは、話し手がその場所を空間的にも心理的にも我々の近くにある([+近(P)])のみならず、情報の面でも相手と共有されていると認識すること(例(6))と、我々にとって空間的にそれほど遠くないと認識([-近 ∩ -遠(P)])するということ(例(7))によるからであろう。それに對して韓国語では、日本語の中称の「ソ」(「中立(指示)」の「ソ」)にあたる指示詞が存在しないので、その場所を話し手が自分にとって心理的に近いものと認識した場合([+近(S)])、つまりあたかもその場所を目前にあるかのように見立てて指す場合には「이」(例(6))、自分にとって空間的にも心理的にも遠くないものと認識した場合([-遠(S)])には「저」(例(7))が用いられていると考えられる³⁾。それは、話し手が現実の場面内の聞き手を自分と對立の立場に立つものと認識して場を構成する際、その指示形式(「對立型」)における聞き手の領域(勢力圏)内の対象を指示する場合だけに「그」が用いられ、その際、その対象は聞き手に認知されているのが必要条件となっている(「聞き手認知条件」⁴⁾と呼ぶ)からであろう。このようなことによって、日本語の指示詞

3) この例(6)、(7)のような日本語の中称の「ソ」に對し、韓国語では次の例のような多様な譯し方がなされることがある。というのは、韓国語では日本語の中称の「ソ」に当たる指示詞が存在しないので、話し手が空間的または心理的にそれほど遠くない場所を指示するためには、「이」や「저」、及びその意味に近似した表現を用いざるを得ないからであると考えられる。

- ・「そこまで出掛けよう」と、父は言った。(『挽歌』、p.45) ⇒ “잠깐 근처로 나가자.” 하고, 아버지는 말했다. (『만가』, p.44)
- ・「そしたら、車でお行きやしたら?」「なあに、じきそこだ、歩いたって譯あないさ」(『蓼喰う虫』、p.198) ⇒ “그럼, 차로 가지지 그래요?” “뭘, 바로 코끝인데, 걸어도 충분해.” (『갓쓰고 박치기도 제멋』『한길세계문학6』, p.197)

4) ここでは「그」の「聞き手認知条件」について、次のように定義しておく。

(a) 聞き手認知条件

との対応関係にずれが生じるようである。

(8) 女は丘の上からその暗い木蔭を指した。

「あの木を知っていらして」という。

「あれは椎」(『三四郎』)

여자는 언덕 위에서 그 어두운 나무그늘을 가리켰다.

“저 나무를 알고 계세요?”한다.

“저긴 메밀жат밤나무.”(『산시로』)

例(8)の状況においては、話し手が聞き手の視点を自分に一体化して自己の視点だけを参照した上で、遠称の「ア」を用いてその知覚対象の指示あるいは提示、照応を行なっている。すなわち、ここでの「ア」は、話し手が聞き手も自分と共通の認識を持つと想定して「われわれ」の場を構成した上で、空間的に我々の遠くにあると認識([+遠(P)])したものを指し示す際の、融合型の「ア」と同じ性質の「ア」に違いない。このように日本語では、「ア」(あの木)→「ア」(あれ)による知覚対象の提示・照応にも見られるように、ある状況において知覚対象が「ア」で指示されたものを受けて言う時には「ア」が用いられることがほとんどである。つまり、日本語の指示詞表現は話し手・聞き手の知識や現場など、言語場に對する依存性が高く、言語場と獨立した談話構造がほとんど認められないので、現場指示の「ア」で提示・指示した対象はひきつづき現場指示の「ア」で照応・指示するのが自然であると考えられる。それに対して韓国語では、話し手が聞き手も自分と共通の認識をもつと想定して「우리」という場を構成した上で、空間的に「우리」の遠くにあると認識([+遠(P)])したものを「저 나무」(あの木)でのように「저」で指示する。が、日本語とは違って、知覚対象が「저」で指示されているものを受け答えする時(照応関係が成立する時)、そこには二通りの表現の仕方がある。一つはいわゆる文脈指示の「그」で對話の中に前述言及されたものを照応、指示する場合であり、もう一つは現場指示の「저」で照応、指示する場合である。すなわち、前者の場合は一度言語的文脈に登場した対象は「그」で指示し、後者の場合は現場に對する指し直しがあれば現場指示の指示詞「저」をも使用できるということである⁵⁾。このように韓国語の指示詞表現は、その談話構造がある程度まで、言語場から獨立したものとして扱うことが可能なので、「저」によって提示された現場の指示対象をいわゆる文脈指示の「그」で照応、指示できるようである。そして、そのような点で、常に現場

「그」は聞き手の近くにあるのみならず、聞き手の認識していると想定する対象に限って指示できる。

5) 現場に對する指し直しに使われる「저」について、장경희(1980)では、次のような例を挙げて、

・A1 : 저 사람 좀 잡아 줘요.

B : 파란 잠바 입은 저 사람 말이야?

A2 : 네 {저/그} 사람이 날 때렸어요 (p.169)

そのA1において「저」で指示された対象に對して、その対象の確認が問題となっているBのような場合は、「저」が一般的であると説いている。

および現実の経験に指示の基盤を持っている日本語とは対照的であると言えよう。

さて、例(8)のように、話し手と聞き手との視野の中に指示対象が入った状態で指示行為が行なわれる場合もあれば、次の例(9)のようにその視野からはずれている状態で指示行為が行なわれる場合もある。

- (9) 「いや、何か支度もしてあるようだが、私はこれから**あれ**を連れて瓢亭へでも行って来ましよう。ねえ、あなたには別に、異存がお有りじゃあないでしょう」
「ですが、**あれ**が素直に承知しますかどうかですか。……」(『蓼喰う虫』)
“아니, 뭐 준비도 하는 모양이지만, 난 이제부터 ①**저** **엘** 데리고 호오데이에라도 갔다가 오지. 응, 그대로서 별 의의는 없겠지.”
“허나, ②**저** **사람**이 순순히 응할는지, 어떨는지요…….”(「갓쓰고 박치기도 제멋」『한길 세계문학6』)

例(9)ではすぐ前まではその場にいたが、現在は話し手と聞き手の視野の中に存在しない対象について指示行為が行なわれている場面を描いている。またここでは、話し手が聞き手も自分と共通の認識を持つと想定して「われわれ」の場を構成した上で、時間的に我々の遠くにあると認識([+遠(P)])した過去の具体的な共有知識の対象(一方の娘であると同時に他方の妻であるもの)を遠称の「ア」で指示あるいは提示、照応している。この際の「ア」は、話し手・聞き手の視野内ではなく、かつ両者の觀念に共有されているものをその指示対象にしているので、觀念(・記憶)指示の一種であると解しうる。一方、韓国語では、話し手が聞き手も自分と共通の認識を持つと想定して「우리」の場を構成した上で、空間的に「우리」の遠くにあると認識([+遠(P)])したもの(即ち、すぐ前までは両者の視野内にあったが、現在では存在しないもの)を遠称の「저」で指示している。この場合の「저」は、對話の前に話し手・聞き手が指示対象を見た上で、發話の際にもそれが同じ空間(同じ家)にいると認識した時用いられているようである。すなわち、ここでは現場指示の擴張によって「저」が使われていると言える。さらに、「①저」による指示対象の提示に對し、「②저」のみならず「그」による照応も可能であるが、それは一度言語的文脈に導入された要素は普通「그」で示すという韓国語の指示詞表現の特色によるものと考えられる。

このような例(8)、(9)の韓国語では、現場の指示対象が話し手・聞き手の視野内の要素であるか否かを問わず、一旦現場指示の「저」で提示、指示された対象を照応、指示する場合には、現場指示の「저」とともに、いわゆる文脈指示の「그」も使用されることが観察できる。一方、日本語では、現場の指示対象が話し手・聞き手の視野内の要素である場合にのみ、現場指示の用法が成立するので、この用法の例(8)では、日本語には一度現場指示の「ア」で提示、指示した対象はひきつづき現場指示の「ア」で照応、指示するという原則があることが確認される。

つまり、現場指示における両言語の遠称指示詞の提示に対する照応面での相違点は、韓国語では一度共有された現場の要素でも、現場指示の擴張による指示行爲か、その要素に対する指し直しの指示行爲(即ち、指示対象の確認行爲)が行なわれない限り、自動的にいわゆる文脈指示によって指示されるのに對し、日本語では一度共有された現場の要素として指示されたものは、その後もいちいち現場指示がなされなければならない、いわゆる文脈指示が用いられることはない、という両言語における指示トリガー・ハイラーキー(金水・田窪(1992)参照)の差6)にも起因するものと考えられる。

このように現場指示の「融合型」においては、(話し手による)聞き手視点の参照様式の有無、指示対象に対する聞き手の視点の捉え方、空間的・心理的距離、言語場への依存性、主客結合の視点、相手との情報の共有、現場指示の擴張による指示行爲、現場の要素に対する指し直しの指示行爲(指示対象の確認行爲とも)、指示トリガー・ハイラーキーのような要因の働き方の差によって、両言語の各指示詞の選擇が行なわれているようである。以上のようなことをまとめると、次の通りとなる。

(a) 日本語、韓国語とも、(話し手による)聞き手視点の参照様式がある。が、両言語における指示対象に対する聞き手の視点の捉え方には違いが見られる。

(b) 日本語では、知覚対象に対する空間的・心理的な距離が

[+近(P)] であれば、 中称の「소」(例(6))

知覚対象に対する空間的な距離が

[+近(P)] であれば、 近称の「코」(例(5))

[-近 n-遠(P)] であれば、 中称の「소」(例(7))

[+遠(P)] であれば、 遠称の「아」(例(8))

韓国語では、知覚対象に対する空間的・心理的な距離が

[-遠(S)] であれば、 遠称の「저」(例(7))

知覚対象に対する空間的な距離が

[+近(P)] であれば、 近称の「오」(例(5))

[+遠(P)] であれば、 遠称の「저」(例(8,9))

知覚対象に対する心理的な距離が

[+近(S)] であれば、 近称の「오」(例(6))

がそれぞれ用いられる。

6) 日本語では、同一の要素が現場、経験スペース、その他のスペースなどにまたがって存在し、それらがコネクターでつながれているとき、どの要素を指示トリガーとするか、という選擇に關して、一定のハイラーキーを有している(金水・田窪(1992)、p.143)。以下、日韓両言語における指示トリガー・ハイラーキーを示してみよう(序列図は筆者によるもの)。

・日本語：《現場指示>觀念指示>いわゆる文脈指示》(金水・田窪(1992)、p.145 参照)

・韓国語：《現場指示>いわゆる文脈指示・觀念指示》

- (c) 韓国語では、主客結合の視点によって近称の「이」(例(6))が用いられることがある。
- (d) 日本語では、遠称の「ア」による知覚対象の提示・指示に對して、言語場への依存性、指示トリガー・ハイラーキーのような要因によって「ア」のみによる照応・指示がなされる(例(8))。また、相手との情報の共有によって中称の「ソ」が用いられることがある(例(6))。
- 韓国語では、遠称の「지」による知覚対象の提示・指示に對して、言語場への依存性、現場指示の擴張による指示行爲、現場の要素に對する指し直しの指示行爲、指示トリガー・ハイラーキーのような要因が絡みあって、「그」でも「지」でも照応・指示可能である(例(8,9))。

4.2.2 「對立型」

話し手が現實の場面内の聞き手を、自分と對立した立場に立つものと認識して場を構成する時の、指示形式を「對立型」と呼ぶ。

- (10) 「いいから早く顔を洗って降りていらっしやい。あなたにもお土産があるんだから」窓を見上
 げている高夏の顔は、梅の枝に遮られていた。
- ① 「その犬？」
- ② 「うん、こいつが目下上海で大流行の奴なんだ」(『蓼喰う虫』)
- ③ (略) “그 개예요?” “응, 이것이 목하 상해에서 크게 유행하는 놈이지.” (“갓쓰고 박치기도 제멋」『한길세계문학6』)

例(10)では、話し手(情報の送り手)がお土産の犬を「ソ」で指しているのに對し、同じ知覚対象を話し手(情報の受け手)は「コ」で指し示している。すなわち、話し手が現實の場面内の聞き手を自分と對立した立場に立つものと認識して場を構成した上で、自分にとって空間的に相手の近くにあると認識([+近(P)∩+近(H)])したもの、即ち聞き手の優位に關わっている対象は對称の「ソ」(「聞き手領域(指示)」の「ソ」)で指しているのに對し、空間的に自分の近くにあると認識([+近(P)∩+近(S)])したものは、即ち聞き手より話し手のほうが優位に關わっている対象は自称の「コ」で指していると言えよう。このような「ソ」と「コ」による知覚対象の指示には聞き手の視点が積極的に参照されるのみならず、領域の意識も働くのである。一方、韓国語では、話し手が現實の場面内の聞き手を自分と對立した立場に立つものと認識して場を構成した上で、自分にとって空間的に相手の近くにあると認識([+近(P)∩+近(H)])したものは對称の「그」で、空間的に自分の近くにあると認識([+近(P)∩+近(S)])したものは自称の「이」で指している。そして、「이」と異なって「그」の指示対象は、(聞き手に近く、しかも)話し手・聞き手ともに知られている必要があると考えられる。というのは、韓国語の場合、話し手は聞き手に認識しにくいものを「그」で指示しないのが普通であるからである。さらに「그」と「이」による知覚対象の指示には、聞き手の視点が積極的に参照されるだけでなく、領域の意識も作用している。このような兩言語の指示詞の對照例においては、「物」を指示対象にして指示行爲が

行なわれる場合もあるが、以下の例(11)のように、「物」とともに「人」もそれに含めて指示行為が行なわれることもある。

(11) a. (對座している聞き手の側近くに未知のものがある場合)

それはなんですか。(그것은 무엇입니까?) (宋(1990)、p.145)

b. (對座している聞き手の側近くに未知のひとがいる場合)

その方はどなたですか。(이 분은 누구십니까?) (宋(1990)、p.145)

c. (對座している聞き手の側近くに未知のひとがいる場合)

その人はだれですか。(이 사람은 누구입니까?)

例(11)の場合、日本語では聞き手の領域内のものは人であろうと物であろうと「ソ」で指しているのに對し、韓国語では、知覺對象が人か物かによって「이」と「그」が使い分けられている。このような韓国語指示詞の使い分けについて、田村(1978)は、人であれば話し手・聞き手共通の領域と認めて「이」、物であれば聞き手の領域と認めて「그」が用いられると説明している。そして、韓国語で、對象が人であれば話し手・聞き手共通の領域とみなし、聞き手の領域とみなさない理由について、恐らく、敬語意識とからんでくるのではないかと述べた⁷⁾。が、(c)にも見られるように、このことが必ずしもそういうことのみによるのではないと考えられる。このことを明らかにするため、以上のようなことを他の観点から解釋していく必要があるであろう。すなわち、日本語では話し手が空間的にも心理的にも相手の近くにあると認識([+近(P) ∩ +近(H)])したものは「ソ」で指示するのに對し、韓国語では話し手が空間的にも心理的にも相手の近くにあると認識([+近(P) ∩ +近(H)])した「物」は「그」で指すが、心理的に自分の近くにあると認識([+近(P) ∩ +近(S)])した「人」は、たとえ面識のない第三者だとしても、親近感を込めて「이」で指し示すものと考えられる。このように、ある状況において「ソ」と「이」で「人」を指示する場合には、次のような比喩表現(主客分離・結合の視点)でも説明が可能であろう。つまり、映畫撮影所である映畫のリハーサルが始まったと想定して、話し手が映畫監督の立場となって舞台から離れた場所で俳優の演技などを指導、指揮する時には「ソ」を用いるのに對し、話し手自らが直接舞台に上がって俳優になったつもりでその演技などを指導、指図する際には「이」を使用するようなものだと考えられる。

7) 田村(1978)は、このことについて、次のような具体的な説明を加えている。

「日本語は、相手との關係を意識する相對敬語であるといわれる。ところが、韓国語は絶対敬語とよばれる面をもち、たとえ尊敬されるべき聞き手に屬するものでも下称が用いられたり、話し手に屬するものでも上称が用いられたりする。對象となる者は話し手、聞き手に關係なく超越しており、社會構造を背景にして扱われるべきものなのである。このような敬語意識の違いが指示詞の中にも差異として現われてきているのではないだろうか」(pp.8~9)

- (12) 「おまえ、何だってまた来たの。留守番してなさいって言ったのに。あれ、そのかたはどなた？」

チョムスニの母親は息子の後にもう一人誰かいるのに気がついてたずねた。「わたしです」という聲で誰だかわかったらしく、彼女はていねいに目礼した。(「民村」『朝鮮短篇』上)

“너는 왜 또 오니? 집 보라니까…… 저이는 누구야?”

하는 점순이 모친은 점동이 뒤에 또 한 사람이 있는 줄을 비로소 알고 묻는 말이었다. 그래 목소리를 듣고 그제야 안 것처럼 그는 다시 정답게 아는 체를 한다.(「민촌」『한국소설문학대계10』)

例(11)と同じく例(12)でも、日本語では話し手が聞き手の領域内に属しているものと認識した「人」の指示に「ソ」を用いている。が、韓国語ではそれと同じ知覚対象を自分と聞き手の領域外にあるものと認識して「저 이」のように「저」を用いて指し示している。すなわち、例(12)の場合、日本語では話し手が空間的にも心理的にも聞き手の近くにあると認識(〔+近(P)∩+近(H)〕)した「人」を「ソ」で指すのに對し、韓国語では心理的に自分と聞き手のどちらからも近くないと認識(〔-近(P)〕)した「人」を「저」で指していると言えよう。ここでの「저」は、指示対象に對する聞き手の認知には関係なく、話し手が自分にとって見知らぬ第三者を、親近感を込めて指示する際に使われているようである。そして、それと同じ場面において、「네 뒤에 있는 그이는 누구야?」のような、指示対象に對する聞き手目當ての具体的な説明が伴うと、「그」による指示も成り立つようになる(勿論、同じ場面において、未知のひとが聞き手の近くにいる際は、そのような説明がなくても「그」の使用が可能である)。さて、例(12)で指示対象を「人」から「物」に代替した時、「저」は用いられにくいが「그」の使用は可能である。が、「그」を用いる際にも、「네 뒤에 있는 그것은 뭐니?」に見るように、聞き手の認知していない指示対象に對する何らかの説明がなされるべきであるという制約が伴うことになる。しかし、同じ場面での「人」指示の「저」に比べてはその「그」の制約の度合がそれほど大きくはなさそうである。このように韓国語では、指示対象の位置条件と聞き手の認知条件が絡みあった結果、指示対象が「物」か「人」かによって「그」と「저」で指し分けられることもありうるという点で、日本語と對照をなす面も見られる。

- (13) ちょうど近所に出かけて歸ってきた里長の弟がこの聲を聞きつけ戸を開けた。サムドリのやつ面目まるつぶれで顔を赤らめアンヒョブチブを放した。アンヒョブチブは憤りで息をはずませ、

「みてこいつ。こんな夜中に一人で休んでるところにやってきて、うるさくまとわりつくんだよ。いけすかないよ。ねえ引ったててって、うんとこらしめてくださいよ」(「桑の葉」『朝鮮短篇』上)

(略)“저놈 보시오. 이년밤중에 혼자 자는데 와서 귀찮게 겁니다. 저 죽일 놈이오. 줌

끝어내다 중치를 좀 해주시오” (『뽕』『한국소설문학대계22』)

例(13)では、話し手が聞き手に第三者の非行を訴えながら彼を「こいつ」と近称の「コ」で指示している。すなわち、ここでは話し手が指示対象を自分にとって空間的にも心理的にも近いものと認識([+近(P)∩+近(S)])して「コ」を用いている。このような「コ」の代わりに「ア」は用いられにくいと思われる。それに対して韓国語では、話し手が指示対象を「저 놈」と「저」で指示している。すなわち、ここで指示対象が空間的に話し手の近くにいるにもかかわらず「저」が用いられるのは、話し手の空間的視点よりは心理的視点のほうが優先的に働いているからであると考えられる。つまり、指示対象に対して話し手が嫌悪感やいやらしさを抱いている場合には、その対象を自分にとって心理的に遠い存在とみなし([+遠(S)])たい心理態度が關与して「저」で指し示すようである。また、話し手が現場の対象を自分にとって心理的に近いものと認識する際には「이」でも指示可能である。

- (14) (話し手と聞き手とが、へやのなかで、たちばなしをしている時、話し手が手をうしろへやって、つくえをさしながら) 「そのつくえを、ごらん」(高橋(1956))
4) (略)“이 책상을 보렴. 저 책상을 보렴…….”

佐久間の仮説以来、中称の「ソ」は出現しづらいものといわれてきた。が、(14)の例及び「コ・ソ・ア」の領域についての実験結果(高橋・鈴木(1982)、姜(1997)参照)からもわかるように、意識の場の「對立型」でも、中称の「ソ」の存在は確かめられている。この中称の「ソ」は、「聞き手領域指示」の「ソ」とは違って、指示対象に対して話し手のほうが優位を占めて聞き手の視点が参照される際用いられるようである。さらに中称の「ソ」は、話し手にとって心理的にあまり近くないと認識([+近(P)∩(+近(S)∪+近(H))^c])される対象を指示する場合に使われ、それが用いられる場面では話し手による指差しなどのような指示行為がよく伴うようである。それに対して韓国語では、日本語の中称の「ソ」(「中立(指示)」の「ソ」)に当たる指示詞が存在しないので、その代わりに「이」や「저」などが用いられていると考えられる。すなわち、その中称の「ソ」は、韓国語では「이」([+近(S)])や「저」([+遠(S)])、及びその意味に類似した表現(例えば、“(내)(바로)뒤에 있는 책상을 보렴.”)がその役割を分担しているようである。この際、指差しなどのようなジェスチャーがよく付随する。

- (15) ナムドクターがぶっくらぼうにいうのに、屋台の親父はすっかり腹を立てた様子で、二人の間に険悪な空気が立ち込めていた。
「おやっさん、これと、あれと……へへへ……」
ジョンスは陽氣に取り繕いながらガラスケースの大皿を指さした。(『アボジ』)

「아, 예. 저거하고 이거 주세요.」

그들의 통명스러운 대화가 싸움 직전의 거친 호흡 같아 정수가 얼른 나섰던 것이다. 그러나 정수도 무엇을 시켰는지 알지 못했다. 유리문 아래로 가지런히 놓여 있는 빨경고 허연 빛깔들을 향해 무작정 손짓을 했던 것이다. (『아버지』)

例(15)では話し手(ジョン스)が聞き手(屋台の親父)の視点を消極的に参照しつつ意識的に知覚対象を他称の「ア」でも指している。すなわち、ここでの「ア」は話し手が自分と聞き手にとって空間的にも心理的にも近くないと認識([-近(P)])したものを指す時に用いられていると言える。一方、韓国語では、話し手が聞き手の視点を参照しながら、現場の対象を無意識に他称の「저」でも指し示している。この際の「저」は話し手が自分と聞き手にとって心理的に近くないものと認識([-近(P)])したものを指す場合に用いられている。このような例(15)では両言語とも他称の指示詞を使って眼前の対象を指示しているが、その指し方の差には、各々指示対象に対する話し手の意識や聞き手の視点の捉え方のような要因が關与しているようである。

(16) 「ええっ、①この子、調べるってなにを調べるんだい」

6) 「その人金持ちで、ほんとうに兩班で、それでお母さんの言葉通り専門大學校を卒業してそしてまた……」

6) 「②この子ったら、どうでもいいことに出過ぎた心配なんかするんじゃないよ」

6) 「ハハハハ…… じゃあ姉さんはどうでもいいことにしかならないっての？」

「③この子ったら、いわせておきゃ!……(略)」(『濁流』)

「아 ①이년아, 조사가 무슨 조사야?」

「그 사람이 부자요, 다아 양반이요, 그리구 어머니 말대루 전문대학교를 졸업하구, 그리구 또……」

「②그년이 곧 달걀 지구 성 밑엔 못 가겠네.」

「하하하하 ……그럼 언니가 곧 달걀 훈수밖에 안되나?」

「③저년을 그제!……(略)」(『濁流』『한국문학전집6』)

例(16)は長女の結婚問題でお母さんと次女とが話し合っている場面である。ここでは話し手が指示対象を自分にとって空間的にも心理的にも近いものと認識([+近(S)])して「コ」で指示している。すなわち、指示対象に対して話し手の空間的視点と心理的視点が「+近(S)」で同時に作用して「コ」が使われていると言える(その指示対象が自分にとって空間的にも心理的にも遠いものと認識した場合には「ア」の使用も可能である)。さて、例(16)で同じ対象が「コ」で三回も指示されているが、そこでは各々話し手の指示対象に対する感情移入度に差があると思われる。すなわち、①「コ」→ ②「コ」→ ③「コ」の順でその度合が大きくなるようである。それに對して韓国語では、眼前の同対象を指示する際各々「이」「그」「저」が用いられている。すなわ

ち、同じ知覚対象に対する話し手の心理的な距離と感情移入度によって、その対象が各々「近強」の①「ㅇ」・「-近弱」の②「ㄱ」・「遠強」の③「저」で指し分けられていると考えられる。すなわち、同じ知覚対象に対して話し手が自分にとって心理的に近いと認識しつつ強い感情を込めて指示する場合には「ㅇ」が、心理的に遠くないと認識しながら弱い感情を込めて指示する場合には「ㄱ」が、心理的に遠いと認識して強い感情を込めて指示する場合には「저」が各々用いられている。

このように現場指示の「対立型」においては、(話し手による)聞き手視点の参照様式の有無、指示対象に対する聞き手の視点の捉え方、空間的・心理的距離、言語場への依存性、主客結合の視点、指示対象に対する話し手の心理的距離・感情移入度、領域概念、指示対象の位置条件、聞き手認知条件、親近感または嫌悪感移入、指示詞使用時の話し手の意識状態、指差しなどのジェスチャーなど、これらの要因の差によって、両言語の各指示詞の選択が行なわれているようである。以上のようなことをまとめると、次の通りとなる。

(a) 日本語、韓国語とも、(話し手による)聞き手視点の参照様式がある。が、両言語における指示対象に対する聞き手の視点の捉え方には違いが見られる。

(b) 日本語では、知覚対象に対する空間的な距離が

[+近(P) n +近(S)] であれば、 自称の「코」(例(10))

[+近(P) n +近(H)] であれば、 対称の「소」(例(10))

知覚対象に対する空間的・心理的な距離が

[+近(P) n +近(S)] であれば、 自称の「코」(例(13))

[+近(P) n +近(H)] であれば、 対称の「소」(例(11,12))

[-近(P)] であれば、 他称の「아」(例(15))

[+近(S)] であれば、 近称の「코」(例(16))

知覚対象に対する心理的な距離が

[+近(P) n (+近(S) u +近(H)^e)] であれば、 中称の「소」(例(14))

韓国語では、知覚対象に対する空間的な距離が

[+近(P) n +近(S)] であれば、 自称の「ㅇ」(例(10))

[+近(P) n +近(H)] であれば、 対称の「ㄱ」(例(10))

知覚対象に対する空間的・心理的な距離が

[+近(P) n +近(H)] であれば、 対称の「ㄱ」(例(11a))

知覚対象に対する心理的な距離が

[+近(P) n +近(S)] であれば、 自称の「ㅇ」(例(11b,c))

[+近(P) n +近(H)] であれば、 対称の「ㄱ」(例(16))

[-近(P)] であれば、 他称の「저」(例(12,15))

[+近(S)] であれば、 近称の「ㅇ」(例(14,16))

[+遠(S)]であれば、遠称の「저」(例(13,14,16))

がそれぞれ用いられる。また韓国語では、このような指示詞の選擇時に、親近感(例(11b,c),(12))または嫌悪感(例(13))の移入のような要因が關与することがある。

- (c) 日本語では、同じ指示對象に對する話し手の心理的距離・感情移入度の差によって「コ・ソ・ア」がそれぞれ使い分けられないが、韓国語では、同じ指示對象に對する話し手の心理的距離・感情移入度の差によって、「近強」の「이」・「近弱」の「그」・「遠強」の「저」が各々使い分けられる。(例(16))
- (d) 日本語では、話し手の領域は「コ」、聞き手の領域は「ソ」、その外の領域は「ア」で指し、それらの領域の境界に中称の「ソ」の領域が出現することがあるが、韓国語では、中称の「ソ」に該當する指示詞が存在せず、話し手の領域は「이」、聞き手の領域は「그」、その外の領域は「저」で指すのが一般的である。このような領域の區分時には話し手の意識状態(例(15))、指差し(例(14,15))などのジェスチャーのような要因も關与することがある。
- (e) 日本語では、聞き手の領域内のものは人であろうと物であろうと「ソ」で指すが、韓国語では、知覺對象が「物」か「人」かによって「그」と「이」が使い分けられることがある。この時の「이」の選擇には主客結合視点の要因が關与する。(例(11))
- また韓国語では、指示對象の位置條件と聞き手の認知條件が絡みあって、指示對象が「物」か「人」かによって「그」と「저」で指し分けられることもありうる。(例(12))

5. おわりに

本稿においては、現場指示の各指示形式ではどのような要因の働き方の差によって、兩言語の各指示詞の選擇が行なわれているか、またその指示詞の指示体系の差をもたらす決定的な要因にはどのようなものがあるかについて考察した結果、以下のようなことを明らかにすることができた(各指示形式における日韓指示詞の選擇關係については、下の表(1)~(3)を参照)。

現場指示の「自立型・融合型・對立型」においては、①(話し手による)聞き手視点の参照様式の有無、(現場の知覺對象に對する話し手の、)②空間的・心理的距離、③主客分離・結合の視点、④言語場への依存性などの共通の觀點が、兩言語の指示詞の指示体系の違いをもたらす決定的な要因となるようである。そして、現場指示の「融合型・對立型」においては、①(話し手による)聞き手視点の参照様式の有無、②指示對象に對する聞き手の視点の捉え方、③空間的・心理的距離、④主客分離・結合の視点、⑤言語場への依存性、⑥領域概念のようなものがその指示体系の差を呼び起こす決定的な要因となるようである。

[表1] 【現場指示の「自立型」における日韓指示詞の選擇關係表】

	コ	이	ア	저	ソ
①相手視点参照	-	-	-	-	-
②空間的距離	+近(S)	+近(S)	+遠(S)	+遠(S)	-近 ∩ -遠(S)
③心理的距離	+近(S)	+近(S)	+遠(S)	+遠(S)	-近 ∩ -遠(S)
④言語場への依存性	↑	†	↑	†	↑
⑤主客結合の視点	-	+	-	-	-

[表2] 【現場指示の「融合型」における日韓指示詞の選擇關係表】

	コ	이	ア	저	ソ
①相手視点との一体	+	+	+	+	+
②空間的(∧)心理的距離				-遠(S)	+近(P)
③空間的距離	+近(P)	+近(P)	+遠(P)	+遠(P)	-近 ∩ -遠(P)
④心理的距離		+近(S)			
⑤言語場への依存性	↑	†	↑	†	↑
⑥主客結合の視点	+	+	-	-	-
⑦相手との情報共有					+
⑧現場指示の擴張による指示行爲			-	+	
⑨現場要素への指し直しの指示行爲			+	+	
⑩指示トリガー・ハイアラキー			+	+	

[表3] 【現場指示の「対立型」における日韓指示詞の選擇關係表】

	コ	이	ア	저	ソ	그
①相手視点との一体	-	-	-	-	-	-
②空間的 (∧) 心理的距離	+近(P) ∩ +近(S)、 +近(S)		-近(P)		+近(P) ∩ +近(H)	+近(P) ∩ +近(H)
③空間的距離	+近(P) ∩ +近(S)	+近(P) ∩ +近(S)			+近(P) ∩ +近(H)	+近(P) ∩ +近(H)
④心理的距離		+近(P) ∩ +近(S)、 +近(S)		-近(P)、 +遠(S)	+近(P)∩(+近(S)∪+近(H)) ^c	+近(P) ∩ +近(H)
⑤言語場への依存性	↑	†	↑	†	↑	†
⑥主客結合の視点	+	+	-	-	-	-
⑦指示対象への話し手の心理的距離・感情移入度	+近・+強	+近・+強		+遠・+強		-近・+弱
⑧領域概念(話し手領域)	+	+				
⑨領域概念(聞き手領域)					+	+
⑩領域概念(中立領域)					+	-
⑪領域概念(話し手と聞き手の領域外)			+	+		
⑫指差しのような指示行為の同伴			+	+	+	+
⑬親近感移入		+		+		
⑭嫌悪感移入				+		
⑮聞き手認知條件						+
⑯指示対象の位置條件と聞き手の認知條件				+		

【參考文獻】

- 장경희(1980) 「지시어 ‘이,그,저’ 의 의미분석」『어학연구』16-2,서울대학교어학연구소, p.169
- 梅田博之(1973) 「朝鮮語と日本語」『朝鮮學報』第69輯、朝鮮學會、p.39-40
- _____(1982) 「朝鮮語の指示詞」『講座日本語學12 外國語との對照Ⅲ』、明治書院、 p.173-184
- 姜鎭文(1997) 「日韓兩國語の指示語の對照研究」『立正大學國語國文』34、p.11-19
- 金水敏·田窪行則(編)(1992) 『日本語研究資料集 指示詞』、ひつじ書房、p.143、p.145
- 佐久間鼎(1966) 『現代日本語の表現と語法(補正版)』(1983年、くろしお出版より復刊)
- 申惠景(1985) 「韓國語の指示語i,ku,choと日本語の指示詞コ,ソ,ア」『SOPHIA LINGUISTICA』18、上智大學、p.102-112
- 宋晚翼(1990) 「日・韓指示語の對照研究(一)1—「コ・ソ・ア」と「이·그·저」との現場指示用法について—」『教育學研究紀要』35、中國四國教育學會、p.145
- _____(1991) 「日本語教育のための日韓指示詞の對照研究 —「コ・ソ・ア」と「이·그·저」との用法について—」『日本語教育』75号、日本語教育學會、p.136-152
- 高橋太郎·鈴木美都代(1982) 「コ・ソ・アの指示領域について」『國立國語研究所報告71 研究報告集3』、秀英出版、p.1-30
- 田村マリ子(1978) 「指示詞—朝鮮語이·그·저系列と日本語コ・ソ・ア系列との對照—」『待兼山論叢(日本學篇)』12、大阪大學文學部、p.8-9
- 西出和彦(1993) 「空間の言語學」『月間 言語』22-8、大修館書店、p.38-39

【用例出典】

- 谷崎潤一郎 「갓쓰고 박치기도 제멋」『한길세계문학6』, 한길사, 1981
- 김정현 『아버지』, 문이당, 1997
- 나도향 「뽕」『한국소설문학대계22』, 동아출판사, 1975
- 三浦綾子 『설령』, 설우사, 2002
- 遠藤周作 「바다와 독약」『한길세계문학6』, 한길사, 1981
- 原田康子 『만가』, 모음사, 1992
- 이기영 「민촌」『한국소설문학대계10』, 동아출판사, 1995
- 川端康成 『산소리』, 웅진출판사, 1995
- 채만식 「탁류」『학원한국문학진집 6』, 학원출판사, 1994
- 夏目漱石 『산시로』, 한국외국어대학교 출판부, 1995
- 遠藤周作 『海と毒藥』, 新潮文庫、新潮社、1960
- 大村益夫 外2人 『朝鮮短篇小説選(上)』, 岩波文庫、岩波書店、1984
- 川端康成 『山の音』, 新潮文庫、新潮社、1957

- ・キム・ジョンヒョン『アボジ』、双葉社、1998
- ・高橋太郎「「場面」と「場」」、『國語國文』25-9、京都大學文學部國語國文學研究室、1956
- ・谷崎潤一郎『蓼喰う虫』、新潮文庫、新潮社、1951
- ・チェ・マンシク『濁流』(韓國文學名作選)、講談社、1999
- ・夏目漱石『三四郎』、新潮文庫、新潮社、1948
- ・原田康子『挽歌』、新潮文庫、新潮社、1961
- ・三浦綾子『塩狩峠』、新潮文庫、新潮社、1973

※出典が表示されていない例文は、ネイティブチェックを経ている作例によるものである。

K C I

要 旨

日韓兩言語における指示詞は種々の面で一致するとされている。が、一方では、「現場指示」の場合において、聞き手の視点が話し手の視点と相対立しながら、話し手が空間的または心理的に自分と相手との領域から少しはずれたものを、日本語では「ソ」で指すのに比して、韓国語では「저」で示すような相違点も見られる。すなわち、その際、韓国語では中称の「소」(中立指示の「소」)にあたる指示詞が存在しないので、話し手と聞き手がある程度離れて向かい合っているような位置関係で、そのどちらの領域にも屬さないものが「오」「그」ではない遠称「저」で指されるのである。このように、現場指示における兩言語の指示詞の使われ方には相違点が見られる。このようなことを念頭に置いて、本稿においては、

- (i) 現場指示の各指示形式においては、どのような要因の相違によって、兩言語の各指示詞の選擇が行なわれているか。
- (ii) その指示詞の指示体系の差をもたらす決定的な要因にはどのようなものがあるか。

のようなことについて考察した。

その結果は、以下の通りになる。

現場指示の「自立型・融合型・對立型」においては、①(話し手による)聞き手視点の参照様式の有無、(現場の知覺對象に對する話し手の、)②空間的・心理的距離、③主客分離・結合の視点、④言語場への依存性などの共通の觀點が、兩言語の指示詞の指示体系の違いをもたらす決定的な要因となるようである。そして、現場指示の「融合型・對立型」においては、①(話し手による)聞き手視点の参照様式の有無、②指示對象に對する聞き手の視点の捉え方、③空間的・心理的距離、④主客分離・結合の視点、⑤言語場への依存性、⑥領域概念のようなものがその指示体系の差を呼び起こす決定的な要因となるようである。

キーワード：自立型 依存型 融合型 對立型 空間的視点 心理的視点 遠近概念

투 고 : 2005. 8. 31
1차 심사 : 2005. 9. 10
2차 심사 : 2005. 10. 1

住 所 : (302-762) 대전광역시 서구 탄방동 한가람아파트 9동1205호

電 話 : 042-482-2521/010-4630-2521

e-mail : wonil-kim@hanmail.net